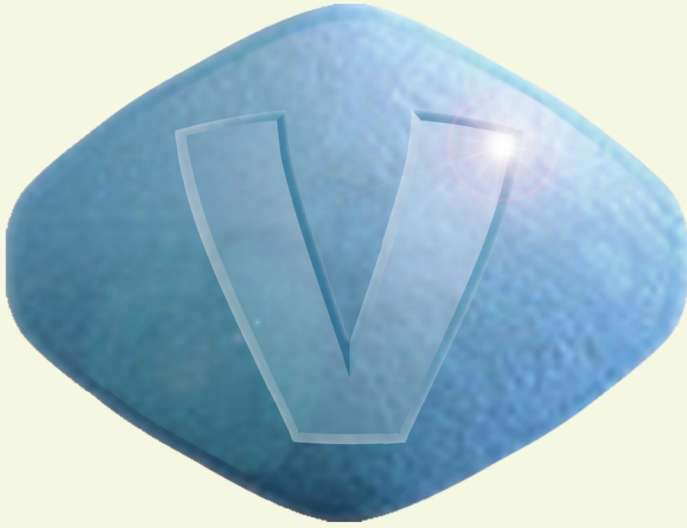
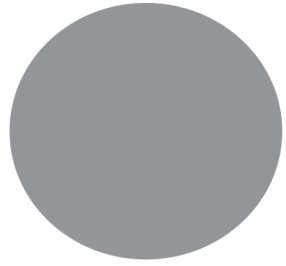


脚茶かかすとパづいるか





喫茶かかしとパブいるか V

夏にもなれば田んぼも畦道も一面濃緑に染まる。
稲に柿にお茶畑。

堀にはカエルにフナやザリガニの小さいの、山の端で椎も栗もその葉は騒々しく風に揺らされて成りかけの小さな木の実がやってくる秋の気配を教えてくれる。そんな夏はのどかでどこまでも果てしなかった。

いいや。ここはある意味常春だった……主に住民の頭の中が。

かと言つてまるつきり世の中から取り残されてるわけでもない。

TVはチャンネル数は少ないけど一応映る。

大手外食チェーンやスーパーもある。

同報無線では時報のチャイム・火事・お年寄りの迷子に加え、最近ではインフルエンザ注意報が流されるようになった……もつともそれで注意を喚起できるのか？と言つたらそこらへんは置いてこう。

「インフルエンザ？そんなん採りたての野菜食つとつたら直るがね！」

合っているようなないような。

水だつてそうだ。上水下水完備なんて何のその。街では当たり前前にミネラルウォーターを買っていたのがこちらは自主管理の地下水井戸水自然水である。

まあそれで煎れる茶は非常に美味しいものの、冬なんかは気をつけないと冷たさに腹を壊す。てかそれ以前に水道管が凍り付いたりするのだ。

ああそんな田舎暮らし、素晴らしきスローライフ。

「……ほんつとなんにもないとこなんですね〜」

出された茶椀を頂きながら開口一番、そいつはそう言つた。

ここは喫茶『かかし』である。

紛うかたなき木の葉の町である。

周囲ではオバちゃんおばあちゃんが野良着姿で昼飯をつつき。外には車ならぬ耕耘機とDQNカーの群れ。そんな田園風景をバックに言う後輩を前に、喫茶店主は不機嫌全開で口を開いた。

「…で？」

「いやー、バスはないしタクシーも来ないし。そうした通

りがあった軽トラのおじさんが乗つけてきてくれました」
助かりましたよー。なんてのんきに笑いやがって。

喫茶『かかし』。

リニューアル後もリニューアル前も常に満員御礼。噂が噂を呼んでいつも客席いっぱい、あの話題の店である。

でもんなこた知ったこちゃないとカウンターの隅、客席を占領して茶をすする店主。こちらも件の中心人物だった。

まあスツールから足を投げ出してだらけるその姿は珍しくない。いつも通りだ。

けど今日に限っては違った……ある意味で。

「あれカカシさんのお友達かね、珍しいねえ」

「やっぱりお友達もカッコいいねえ。外国の人かねえ？」

ヒソヒソこそそワイワイと。

何あれ？誰あれ？なんだろう。なんて痛いくらいの視線は華麗にスルーしよう……背筋を伸ばし長い足を折り曲げて店主の隣に座る異邦人はまるで雑誌の中の人のようだった、とは後に聞くオバちゃん達の言である。

と、店主は後輩に向き直った。

そして質問した。

「いきなり何しに来たの」

が。

「そりやもちろん遊びに。あ、これお土産と頼まれてた物です」
返ってくる即答。

「遊びにい？」

『火の国ばな』のパッケージを遠慮なく剥ぎながら、

ふん、と鼻で返答してやる。

おまけに、

「だって先輩こないだいつでも遊びに来ればつて言つてたでしょ？だからお言葉に甘えて」
しらつと続ける後輩。

そりや確かに言つたけどさあ。

(……誰がこんなすぐ、しかも連絡なしに来るつて思うつかつの)
と、ため息をついた。

* * * * *

「こんにちはい」

そう、いきなり。突然だ。